

[国 語]

読書観を更新し主体的に本とつながっていく過程を 実感・自覚する読書単元の開発

－「ライフワークブック」と「読書ブック」を創る読書活動を通して－

柳澤 里美*

1 はじめに

筆者の勤務校では、朝読書や異年齢集団での読書活動、保護者ボランティアによる朝の読み聞かせや絵本の上映会などを続けている。個人読書だけでなく、コミュニカティブな読者の育成と読書コミュニティの形成を目指していることから、仲間とともに物語絵本の作品に魅了されている姿が見受けられる。筆者も国語科の授業を通して学習者が主体的に読書材とつながり、物語世界を自由に再現する楽しさを味わえるように、教科書と関連する本の紹介や並行読書を組み込んで試行錯誤してきた。しかし、教科書から読書へとつながり、読書観に影響を及ぼすような様相を授業者として捉えることができなかった。松本（2025）もこれまでの図書紹介の機能に触れ、「教科書から読書へというつながりが生まれにくいという状況は問題である」と指摘している。

こうした「教科書から読書へというつながりが生まれにくい」という問題と正対するには、どのような課題を意識すれば良いのだろうか。澤田（2025）は、「これからは、全ての子どもが『読書』という営みと自分なりの関係をつくることを、読書指導の核心に置きたい」と述べ、本との関係づくりを重要視する。つまり、学習者一人ひとりが「読書する営み」を問い、自分なりの見方・考え方を立ち上げながら教科書教材を含む本とつながり、関係をつくるプロセスを実感・自覚化できる学習過程を単元として描き出す必要があるといえる。

では、このような学習過程の姿が具現するには、どのような手立てを単元に組み込めば良いのか。教科書と読書のつながりが意識されない問題と向き合う青山（2020）は、「物語の登場人物の側に立ってみるとか、視点を移動させながら読むとか、何らかの目的なり予測、問いをもって戦略的に、どうしてこうなのだろうか」と考える方略的読書を提案する。ここから、登場人物や語り手という他者のみではなく、読書コミュニティの一員である他者とつながり、視点を転換・移動・共有しながら互いに読みを創り合う方略の良さが実感できる読書材や読書活動が手立てになるのではないかと考える。一方で、生活の中の「読書」や本との付き合い方が自覚されにくい問題に向き合う杉本（2019）は、「『何のために読むのか』そのことを子どもたち自身が実感しない限り、主体的に読むという行為は決して生まれにくい」と述べる。つまり、学習者一人ひとりが自身の読書観を基に、読書の意義や価値を問いながら、自身の読書観を更新していくような読書活動も学習過程の節目に組み込む必要があるのではないかと考える。

以上のことを踏まえ、本実践では、読書観を更新しながら創っていく読書活動と、他者（登場人物・語り手・読書コミュニティの仲間）とつながる読書材を用いた読書活動を組み込むことで、読書観を更新し主体的に本とつながっていく過程を実感・自覚する読書単元の開発を試みる。

2 研究の目的

「ライフワークブック」を基に「読書ブック」を創る読書活動の中で、読書観を更新しながら主体的に本とつながっていく過程を実感・自覚する姿が具現することを、実践及び量的・質的分析を通して明らかにする。

3 研究の構想

(1) 本との関係をつなぎ、広げる見方・考え方が駆動する学習過程を描き出す

読書観を更新し、主体的に本とつながっていくプロセスに顕れる視点・観点に着目した姿を3過程で描き出してみる。一つ目は、主読書材の時代背景や生活文化、家族観や読書観を方略的に見出すことを契機に、学習者が判断しながら自

*上越市立春日小学校

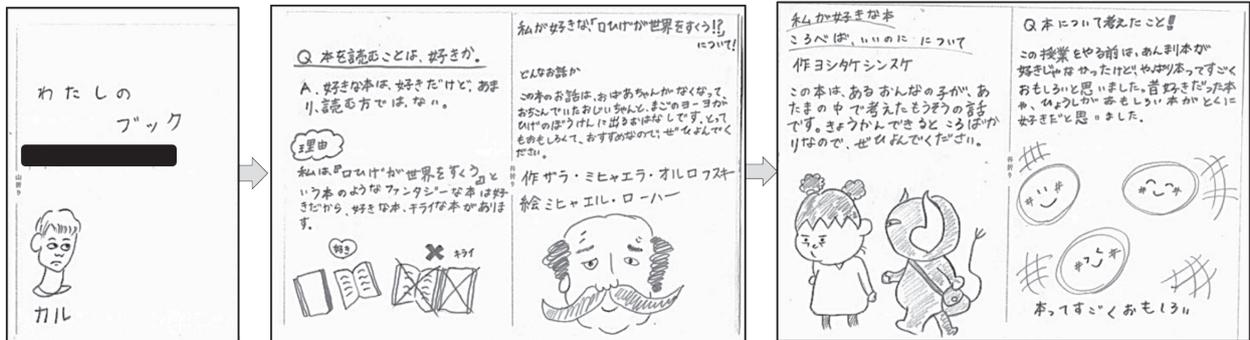
身の読書環境や識字，読書という営みや本の価値へと見方・考え方を広げる過程である。二つ目は，本の選び方や出会い方を学ぶ過程である。本実践では，主読書材の翻訳者「藤原宏之」が翻訳した絵本6冊を紹介する。いずれも「本」がテーマである。更新しつつある読書観が駆動することで，同じテーマやシリーズ本，好きだと感じた本の作者や翻訳者などの他作品を調べて読むという本の選び方への意識も高まるだろうと考えた。三つ目は，読書活動の場やその活動内容を自己選択・自己決定する過程である。澤田（2025）が「読書に向く子は読書を通してその楽しさを味わって言葉の力を身に付け，そうでない子も，それなりに言葉の経験を積みつつ，ほどよい本との付き合い方を見つけてほしい」と述べるように，一人で読む，仲間と読む，図書室で読む，教室で読む，多読する，一冊をじっくり読むなど，個々の読書観や本とのつながりを再認識し，共有してこそ，主体的に本とつながっていく学習者の姿が具現すると考えた。

(2) 読書観を見つめ，本とつながる「ライフワークブック」

学習者が主体的に本とつながっていくためには，一人ひとりの生活（＝ライフワーク）の中に本（＝ブック）がどのように機能しているのかを意識化・自覚化する必要がある。そこで，読書という行為を取り巻く様々な状況や読書に対する思いや考えなどを手作り冊子「ライフワークブック」に表現する読書活動を行う。表紙〈作品1-1〉では，縦書き・横書き，左右開き・上下開きを自己選択し，創り手である学習者の名前を記す。題名は主読書材と関連させ「〇〇のブック」と仮決定するが，本とつながる過程で常時変更可とする。1頁〈作品1-2左〉は，「本を読むことは好きか」と自身に問い，本実践前の読書観を呼び覚ます。2頁〈作品1-2右〉以降の内容やページ数などは本とつながる中で自己決定する。なお，本との関係や読書生活などの観点をまとめた「読書のススメ」〈図1〉を手引きとして提示する。最終頁〈作品1-3〉には，「ライフワークブック」を読み返し，創作前の読書観と比較したり読書生活を見つめ直したりして「本について考えたこと」を綴り，完成となる。こうした創作過程を踏むことで，読書観を更新し，本とつながっていく過程への実感・自覚を促していく。

- ◎読んでいる本や読み終わった本
本の名前・本書いた人の名前・出版社名・発行年月・価格
本を入手した方法・読んだきっかけ・本の好きな言葉や文章や絵・読後感
- ◎本の選び方
タイトル・表紙・もくじ・まえがき・あとがき・人の話
- ◎本との出会い方
友達からの紹介・先生の紹介・読み聞かせを聞いて・本屋で見つけて
図書館で見つけて・家にある本・家族が読んでいた本・ネット・古本屋
- ◎本の読み方
いつ・どこで・どうやって本を読むのが好きか
どのくらいの時間読み続けるか・図書館や書店に行く回数はどのくらいか
インターネットで本について調べるか・本を他の人に紹介するか
- ◎思い入れのある本やお気に入りの本
いつ・どこで・どうして読んだ（読んでもらった）本か
その本の好きなところや覚えていること、何回も読みたい理由
- ◎好きな本のジャンル
物語・映画の原作・新聞雑誌で話題になった本・スポーツ選手の本
歴史の本・科学の本・偉人の本・しゅみや好きなことの本
- ◎好きな本のテーマや読中・読後感
ファンタジー・冒険・ホラー・友情・親子関係・人間関係・人生
推理・恋愛・歴史・科学・青春・社会・エッセイ・詩
わくわく・ドキドキ・笑い・泣ける・元気になる・感動・安らぎ

（図1）本との付き合い方や読書生活などの観点「読書のススメ」



〈作品1-1〉学習者 Or 「ライフワークブック」表紙

〈作品1-2〉学習者 Or 「ライフワークブック」左P1. 右P2

〈作品1-3〉学習者 Or 「ライフワークブック」最終頁

(3) 主読書材「ぼくのブック・ウーマン」を通して読書の意義や価値を問い，他者とつながる「読書ブック」

学習者が自身の本とのつながりや読書コミュニティ，読書生活を問い直しながら読書観を更新していくのではないかと期待がもてる読書材として，本や読書がテーマの翻訳物語「ぼくのブック・ウーマン」を主読書材とする。本の世界とかけ離れた生活を送る中心人物兼語り手「カル」が，図書館員の女性「ブック・ウーマン」と出会い，周りの環境や人からの影響を受けながら本を読む少年へと変貌する。学習者と年齢が近い少年「カル」の視点を「ブック・ウーマン」や本，家族など多面的に移動する方略で読むことで，学習者は再現性の高い物語世界で「カル」の心中とつながり，変化を契機に自分の見方と重ね合わせるだろう。そして，語り手「カル」の視座を通して読書の意義や価値を見つめ，手作り冊子「読書ブック」〈作品2-1表紙〉に書き起こすことを期待する。さらに，仲間との意見交流では，「読書ブック」に自他の考えの共通点と相違点を図化〈作品2-2左〉し，思考することで，多様な読みとつながり，新たな読みの観点を獲得する。最終頁は，主読書材の読みや図化・思考を振り返り，自分の読みや読書観を問い直して更新していく姿〈作品2-3〉や，他者とのつながりによって視野の広がりを実感する姿〈作品2-4〉が具現すると考えた。

ではない」と「あまり読む方ではない」と記述した学習者にも見られた。澤田（2023）は、学校という集団の中で「良い読者とは、文字の小さい、難しい本を読める読者である」という能力観がマイナスに働く場合もあると指摘する。つまり、文字数の多い本に対して直観的に抱く能力観（読める・読めない）が、好きか否かの判断につながっている可能性が高い。しかし、学級全体の約6割が「本を読むことが好き」と判断し、「好きな本は好き」と記述した8名中4名が「読み聞かせは好き」と記述している。これは、校内の読書コミュニティ形成の成果だと捉えられる。なお、「読み聞かせ」という言葉は、本を読むことが「好き」という学習者からは表出していない。8名中5名が読書中の感覚、感情や登場人物の心の揺れ動きを感知・理解することを通して読書の楽しさを見出し、「本が好き」と記述していた。

〈表1〉本実践前の本との関係や読書観について

※割合は小数第二位四捨五入

記述の内容	人	割合	本実践前の読書観の記述例
好き	8	29.6	・想像力が働かし、思いもよらない角度でくることがあるから好き。 ・おもしろい本を読んでいると、心がワクワクするからです。
好きな本は好き	8	29.6	・小説は好きではない。読み聞かせの時間や聞く時は好きです。動物やホラー系の本が好き。 ・読み聞かせの時間や絵本は好きだけど、小説とかはあまり好きではありません。
ふつう	2	7.4	・「ひまな時によみたい」とはならない。 ・前は武将や歴史の本が好きだったけど、たくさん読むにつれてつまなく感じてきたから。
好きではない	7	25.9	・読みたい本が見つからないのと、目で文字を追うのが苦手だからです。 ・字の数がとても多いので集中して読めなかったり、読むのがめんどくさくなったりする。
あまり読む方ではない	2	7.4	・文字が小さいし、たくさんあるからめんどくさいと思っている。あまり読まない。 ・本はあまり読まない。

表2を見ると、「好きな本は好き」と記述した学習者が、好きな本とのつながりを持続させながら、他ジャンルや文字数の多い本とつながろうとしている。さらに、12人中10名が「ライフワークブック」前半部に「好きな本」や「お気に入りの本」をまとめ、後半部は筆者が紹介した読書材や図書室で出会った本、仲間と読んだ本をまとめた。これは、これまでの読書経験や心に残っている本を回顧し、懐かしさとともにその良さを再認識する最中、新たな本との関係をつくり広げる姿に発展したと考えられる。このような姿は、「好き」が持続・向上した学習者にも多く見られた。また、表1で「好きではない」「読まない」と記述した9名中4人が「読書」という営みや「本」という存在を問い直し、その意義や目的に関する記述をした。これは読書に対して肯定的な記述の学習者の比率より高い。これらのことから、「何のために読むのか」を学習者が自覚することは、読書観や本とのつながりをつくるための重要な契機となる。

〈表2〉本実践後の本との関係や読書観の変容や更新について

※重複分類あり 割合は小数第二位四捨五入

記述の内容	人	割合	本実践後の読書観の記述例
「好き」が持続・向上もつと/やっぱり/楽しい	8	29.6	・何回も読み返すと、ちがう見方もできて、本はやっぱりおもしろい。 ・本を読みながら、いろんな考えを思いつきながら、考えて本を読もうと思った。
「好きな本は好き」から他の本への広がり興味/他の/違う/もちろん	12	44.4	・もちろん、怖い本や動物の本の方が物語系より好き。それ以外も興味をもつようになった。 ・今まで読もうとしてこなかった他の文字が多い本や難しい本でも、理解できたら、本の人物たちはどう思っているのかが分かったりして面白かったです。
「ふつう」から「好き」への向上好き/楽しい/これから	2	7.4	・1階の図書室に行ってみると、なつかしく好きだった本があったし、翻訳物語だと「クマとこぐまのコンサート」がとても感動するお話でした。たまたま読むと、楽しさがわかった気がしました。
「好きではない」から「好き」への変容好き/最初のころよりも	4	14.8	・最初はそんなに気にならなかったけど、どんどん気になってきて、好きになりました。 ・最初はあまり本が好きではなかった。けれど今は、最初よりも本が少しかだけ好きになった。 ・最初は好きではなかったけど、自分に合う本を見つかることができて好きになった。
「好きではない」「読まない」から本との関係構築読んでいく/良い/好き	7	25.9	・本は、主人公や出ている人の性格や感情を読みとれる。それを考えて読んでいきたい。 ・人には、本が好きでいい人、好きじゃない人それぞれいる。ぼくは本があまり好きじゃないけど、この勉強を通して、本にきょうみをもつようになりました。

(2) 「ライフワークブック」に何を描いたか ―本とのつながりを実感・自覚化する過程の分析―

ここでは、学習者が「ライフワークブック」に何を表現したのかを見ていく。表3を見ると、学級全体では主に「お気に入りの本」「心に残っている本」という読書経験による記述と「本の選び方」「好きなジャンル」という自分に合う本の選び方に関する記述とが存在した。このことから、これまでの「読書」という営みや出会った本とのつながりを自覚する中で、読書観を更新していったと考察できる。また、本実践を通して「本が好き」が持続・向上した学習者に「本の読み方」と「読書環境」の記述がある。これは、「本を読むことが好き」という思いを実感する中で、それを支える読書生活があることを学習者が自覚し、本とのつながりを拡充したと考察できる。

〈表3〉「ライフワークブック」で顕れた本との関係や読書生活を捉える視点・観点の出現回数

※重複分類あり（）人数

	お気に入りの本	心に残っている本	好きな登場人物	本の選び方	好きなジャンル	好きなテーマ	好きな作者	挿絵・イラスト	再読・読み返し	好きな読み方	主読書材	他の翻訳物語	藤原宏之の作品	新たな読書記録	家にある親の本	学校の図書室	市営図書館
好き (8)	3	3	1	1	4	1	1	2	2	2	1	1	1	2	1	1	2
好きな本は好き (8)	5	2	2	3	4			3	1			4	1	1			
ふつう (2)	1		1		1							1					
好きではない (7)	3	2	1	3	4			1				3					
あまり読む方ではない (2)	2	1		1													

(3) 抽出児童が本との関係をつくり広げていく過程の姿と要因

① 本を読むことが「好きではない」から本とのつながりをつくり出した学習者A

Aは、「ライフワークブック」の1頁に「本を読むことはあまり好きじゃない」と書き出し、理由を「文字がたくさん書いてある本は好きじゃない」と記述した学習者である。Aの記述は以下の通りである。

	主読書材「読書ブック」	読書活動「ライフワークブック」 表紙「ほくのブック」
一次	①初読の感想 最初、本が好きじゃない少年カルに馬に乗った女性が本をたくさん持ってきてくれて、最後は本が好きになっていて、すごいと思った。 ②カルの見方・考え方の変化 ブックウーマンが春夏秋冬、天候関係なく2週間に1回、必ず来てくれて、本を持ってきてくれるから、考え方が変わった。本が好きになった。	P1 Q本を読むことは好きか あまり好きじゃない。文字がたくさん書いてある本は好きじゃない。 P2 〈本の選び方〉・スポーツに関係する本 ・おもしろい本 P3 翻訳物語「スイミー」レオ＝レオニ 訳 谷川俊太郎 最初に仲間が魚に食べられて、全員がマグロに食べられてスイミーは一人になったが、色々な魚と出会う。(中略) みんなで大きい魚を作って楽しく終わる話で良かった。
二次	③選択した対象「本」 183ページの3行目から変わった。前はニワトリの引かいた文字だとカルは思っていて、本は読んでなかったけど、今は何が書いてあるか分かると言っているから、ブックウーマンが何回も来てくれて、本が好きになった。	P4 (ページ全体に「スイミー」の挿絵のイラスト) P5 Q本について考えたこと 最初は、本があまり好きじゃないと書いたけれど、いろいろな翻訳物語を読んで、こんな本もあって良いなー！と思いました。本にはたくさんの種類がある。それが良いなと考えました。
三次	④振り返り 5人で班をつくって発表をしたけれど、ほとんど同じ意見の人がいたし、けっこうちがう人もいた。語り手カルは「楽しい」などの感情を出さないと聞いてびっくりしました。見方がちがったら、同じところもあるけど、ちがうところもある。多面的にみるのは良いことだと思いました。	P6 〈好きな本〉 野球の本やバスケの本 (ページ中央に表紙のイラスト) P7 〈面白いと思った本〉 「54字の物語」小説や謎解きなど今まで12巻が出版されています。一冊でも買ってみてください!

「読書ブック」では、初読の「本が好きじゃない少年カル」という表現にAの共感が顕れている。Aは、「カル」が「本が好きになった」という事実に触れ、叙述を拠り所にしながらその変容を読み進めたと言える。振り返りでは、仲間との意見交流による新たな読みの発見、語らない語り手カルの心を見出す多面的な見方の有用性にまで学びが発展した。

では、なぜAはこのように振り返ったのだろうか。それは、読書材を共有する仲間と読みをつくる過程を楽しんだからである。Aは、①初読の感想で7人〈作品3〉、②の問いで9人、③の問いで3人の仲間と意見交流した。さらにAは、その後の読書活動で図書室に行き、仲間と「スイミー」を音読し、読後感や懐かしさを語り合う。そして、「ライフワークブック」にイラストとともに要旨をまとめた。Aは、コミュニケーションに本との関係をつくり広げたとと言える。

② 本を読むことに対する「好き」が持続・向上した学習者B

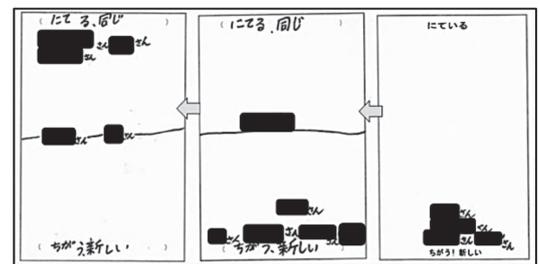
Bは、「ライフワークブック」の1頁目に本が前から好きな理由を「主人公のことがくわしく書かれているところ」と記述した。その記述は次頁の通りである。Bは、本実践の最中も一貫して各読書材の「登場人物」の変化や人物像に着眼するスタンスが顕れた。その姿は、「好きな読み方」すなわち「自分の読み」を確立しているといえよう。本実践の前半、主読書材では中心人物・語り手「カル」の見方の変化、「ライフワークブック」では戦国武将「藤堂高虎」の人物像に焦点化した読みであった。本実践後半では、主読書材で「カルがブック・ウーマンに出会ったからこそ」と強調し、「ブック・ウーマンがこの物語にはかせない」と人物相互の関係性を俯瞰的に捉える読みをした。また、「ライフワークブック」では、筆者が紹介した翻訳物語から登場人物が多く、色彩豊かな絵が描かれている「スミス先生とふしぎな本」を選書し、個人読書を通して物語の世界観を自分の言葉でまとめた。このようにBは、既存の「自分の読み」の視点・観点を駆動させながら、「読みの授業」で得た方略的読書の観点を組み込んだ読みを試みたと推測できる。



〈作品3〉考えを図化したAの「読書ブック」P2

	主読書材「読書ブック」	読書活動「ライフワークブック」
一次	①初読の感想 毎回、カルの家のために1日ばかりで本を運んできていて、その女の人はとってもやさしい人だと思いました。ブックウーマンのやさしさがとても伝わってきました。 ②カルの見方・考え方の変化 主人公のカルが、ブックウーマンの勇気に気づいたから。馬だけでなく、ブックウーマンも同じだと気がついたから、変わった。	表紙「ぼくのブック」 P1 Q本を読むことは好きか 前からずっと好き。主人公のことがくわしくかかれているところが好き。絵もリアルで色づかいが好き。 P2 戦国人物伝「藤堂高とら」 農民から足軽、人足になって、ねんがんの城持ち大名になるため、10回も主をかえる。(中略) 家康に気に入られていて、かっこいいなと思いました。
二次	③選択した対象「本」 最初は本がきれいで、ニワトリのひっかいた字だと思っていたけど、ブックウーマンにも勇気があると気づいてからラクといっしょに本を読むようになる。(中略) カルは、本がきれいじゃなくなった。	P3 ほんやく物語「スミス先生とふしぎな本」 ザックのたんにんのスミス先生が本を読んだら、本の登場人物がたくさん出てきたり、クラスみんなが物語の中に入り込んでしまったりするところがふしぎでした。この本は、他のいろいろな物語の人物が出てきておもしろかったです。
三次	④振り返り カルがブックウーマンに出会ったからこそ、ラクといっしょに本が読めるようになった。だから、ブックウーマンがこの物語にはかかせないと思う。ブックウーマンは、やっぱりすごいと思いました。	P4 Q本について考えたこと 短い絵本も少し読んでみたくって、ほんやく物語もおもしろかったです。前から本がとっても好きだったけど、もっと色々な本を読んてみたくりました。(P5以降記述なし)

さらに着眼したいのが、Bの「ライフワークブック」最終頁の「短い絵本も少し読んでみたくって」という記述である。ここから易しい絵本に対するBの価値判断を垣間見ることができる。しかし、その後の「もっと色々な本を読みたい」という記述からは、仲間との「ライフワークブック」の共有や「読書ブック」での意見交流〈作品4〉を通して、多様な本の価値や読書傾向を再認識し、視野を広げながら本とつながっていきこうとする様相を捉えることができた。



〈作品4〉考えを図化したBの「読書ブック」
右から P2. P4. P6

6 成果と課題

読書観を更新しながらつくる読書活動「ライフワークブック」と、他者（登場人物・語り手・読書コミュニティの仲間）とつながる読書材を用いた読書活動「読書ブック」の創造を学習過程の契機や節目に組み込むことで、学習者が主体的に本とつながっていく視点・観点を3過程で質的に向上させながら、読書観を更新し続けていた。

一つ目の過程では、自身の読書観を基に本や読書がテーマの読書材の読みを契機に、読書の意義や価値、自身の読書生活などを問い直して読書観が更新された。また、方略的読書や自他の考えの図化・思考により、他者とつながり、読みをつくる良さを実感していった。二つ目の過程では、心に残る本や新しい本との出会い、読書生活などを「ライフワークブック」に綴ることで、読書観の更新と本とのつながりが自覚化されたと言える。三つ目の過程では、学習者Nsが「ライフワークブック」〈作品5〉に「一時の休憩やちょっとした時間に読み、気がつけば〇時になっていたなど、休憩時間に読むものが本だ」と綴った。Nsは主体的に本とつながり、読書観を更新しながら自分に合った「ほど良い本との関係」を実感・自覚する姿が具現したと言える。Nsの姿から、今後さらに生活の中の本や読書の機能に着眼した読書単元を開発していきたい。また本実践は、本や読書がテーマの教科書読書材により読書観の更新が促されたが、小学校教科書にそのような読書材が少ない。低・中学年が対象の読書単元開発の在り方やその留意点について検討していく必要がある。



〈作品5〉学習者Nsの
「ライフワークブック」表紙

[引用・参考文献]

- 青山由紀 (2020) 「現代の子どもと読書指導の課題」日本国語教育学会編『月刊 国語教育研究』No.579 pp.2-3
 澤田英輔 (2023) 「自立した読者になる、その一步前の場所で－読書指導の現場から考える『自立した読者』像－」日本国語教育学会編『月刊 国語教育研究』No.619 p.50
 澤田英輔 (2025) 「これからの読書指導の課題② 読書を『指導する』とはどういうことか－読書と関係を取り結ぶための読書支援－」日本国語教育学会編『月刊 国語教育研究』No.641 p.12
 杉本直美 (2019) 『自立した読み手が育つ 読書生活デザイン力 子どもが変わる読書指導』東洋館出版社、pp.13-16
 松本修 (2025) 「これからの読書指導の課題① 読書指導の不可能性から出発する」日本国語教育学会編『月刊 国語教育研究』No.641 p.8